

「存在一元論の可能性」発表資料

高取正大*

2021年9月17日 存在論・形而上学ワークショップ

1 用語法の整理

- 「一元論 (monism)」という用語は一般的に、何らかの主題に関してそれがただ一つであると主張する立場のことを表す。
 - 従って、主題に応じて様々な一元論を考えることができる。
 - － 例えば「実体一元論 (substance monism)」は、存在者の種類に関する一元論であり、「世界の中に存在する対象の種類は、(究極的には) 実体というただ一つだけである」ということを主張する立場である。(存在者の種類に関する一元論の例として、他には、「中立的一元論 (neutral monism)」などが思いつくだろう。)
- こういった一元論のいくつかは、当該分野において主流もしくはそれに近い地位を占める場合もあり、必ずしも本日のセミナーのタイトルである「オルタナティブな存在論」として位置づけられるわけではない。
- しかしながら、以下で発表者が取り上げるのは、こんにちにおいて支持者が極めて少ないような一元論。すなわち、**存在一元論 (existence monism)** とは、存在者の数に関する一元論であり、とりわけ、**実在の中に存在する具体的対象はただ一つのみである**と主張する形而上学的立場である。
 - 存在一元論は、明らかにラディカルな見解である。つまり、我々が受け入れている日常的な常識や科学的知識と直ちに不整合を来すように見える。

2 分析形而上学における存在一元論の検討

- 存在一元論に類する主張は西洋哲学の歴史を通じてしばしば注目されてきたものの (cf. パルメニデス、スピノザ)、分析哲学の伝統においては、まともに取り上げられる機会はほとんどなかったと言ってよい。
- そもそも、分析哲学黎明期においてラッセルおよびムーアの論敵だった人物こそ、一元論者のブラッドリーであり、分析哲学はむしろその出発点からして一元論を忌避していたと言える。
- とはいえ、存在一元論に近いところのある形而上学的見解が議論の対象となることがなかったわけではない。また後述するように、21世紀に入ってから、ややいびつな格好ではあるが、以前よりも存在一元論に言及される機会が増えている。

* 慶應義塾大学非常勤講師 E-mail: masahiro.takatori@a3.keio.jp

2.1 近縁な立場：存在論的ニヒリズム

- **存在論的ニヒリズム (ontological nihilism)** とは、世界が**もの** (存在者、対象、個体...etc.) からなるという考え方 (**「もの存在論 (thing ontology)」** と呼ばれる) を認めない立場である。この立場は、世界は要素や真部分をいっさいもたない、ある種の“かたまり” (‘blobject’ もしくは ‘amorphous lump’ などと形容される) なのだと主張する。見方によっては、実在の中に存在する唯一の対象としてこの“かたまり”のみを認める立場であると捉えられるので、その場合、存在一元論の一つのバージョンとして理解することができる。
- 存在論的ニヒリズムは、Hawthorne & Cortens (1995) を代表として、分析形而上学においてしばしばその可能性が検討されてきた (より近年の批判的検討としては、Turner (2011) を参照)。またこの立場が論じられる際、技術的には、通常の量化言語と同等の表現力をもちながら個体指示表現や量化表現を全く備えていない言語が可能かどうかということが論点となる。そのような言語は哲学的論理学においても興味の対象である (cf. Quine (1960))。
- 他方で、発表者の理解する限り、存在論的ニヒリズムは第一義的には、もの存在論を否定する形而上学的描像を提示するために提出されたという側面が強い。(存在論的ニヒリズムの提示する描像は、しばしば**「材料存在論 (stuff ontology)」** と呼ばれる。) これに対し、存在一元論は、もの存在論を否定することを主眼とはしていない。

2.2 “前座”としての復興——存在一元論と優先性一元論

- 21世紀の分析形而上学においては、存在一元論に言及される機会が以前よりも増えつつある。その大きな要因は、近年ジョナサン・シャファーが展開している、**優先性一元論 (priority monism)** と呼ばれる立場を擁護する議論において、存在一元論が取り上げられることによる (Schaffer (2007), (2010a), (2010b), (2018))。
- 優先性一元論とは、実在の中に存在する**基礎的な (fundamental)** 具体的対象はただ一つであり、とりわけその対象は具体的対象の極大物としての宇宙 (cosmos) 全体である、という主張である。(ここでの基礎性の概念は、主に Schaffer (2008) で提示されている考え方に基づく。)
- シャファーは、量子力学の知見を引き合いに出したり、あるいはよりアприオリな形而上学的論証を与えることを通じて、この優先性一元論を擁護するための議論を展開する。その過程で、優先性一元論がいかなる考え方であるかを解説する際に対比として持ち出されるのが、存在一元論なのである。(なお、存在一元論と優先性一元論という用語法および区別も、彼が導入したものである。)
- シャファーは、存在一元論と優先性一元論を対比したうえで、前者は不条理な見解であるのに対し後者はそうではなく十分に擁護の余地があることを指摘する。彼の考えでは、分析哲学の従来の議論において (存在者の数に関する) 一元論がまともに取り上げられてこなかった大きな理由は、存在一元論と優先性一元論が明確に区別されてこなかったからである。加えてシャファーは、スピノザやブラッドリーといった西洋哲学における重要な一元論者は、実際には存在一元論ではなく優先性一元論を支持していたのだと論じている。
- シャファーの優先性一元論を巡る議論は近年の分析形而上学の中で注目を集めた動向の一つであり、現代形而上学者とスピノザ研究者が合同して Goff (2012) が出版されるなどの成果をもたらした。そして

それに伴って、いわば優先性一元論の“前座”として、存在一元論に言及される機会も以前より増えたように思われる。

3 存在一元論を扱った主な文献

- 基本的な reference としては、シャファー自身による、*Stanford Encyclopedia of Philosophy* の Monism の記事 (Schaffer (2018)) がある。
- ホーガンとポッチによる一連の著作 ((2000), (2002), (2008)) は、こんにちの分析形而上学において存在一元論の大々的な擁護を試みたほとんど唯一の仕事である。(彼らは共著で、もしくは個別に、存在一元論に関連する論文を様々に書いているが、本のかたちでまとめられた Horgan & Potrč (2008) が最も包括的と思われる。) 彼らの主張は、実在の中に存在する具体的対象は、(上述した) blobject としての宇宙全体のみだというものである。Goff (2012) に収められた、彼らとシャファーの応酬 (Horgan & Potrč (2012), Schaffer (2012)) も参照。Goff (2012) の第一部には、その他にも、Lowe (2012) など、Horgan & Potrč への批判を扱った論文が含まれている。
- ホーガン&ポッチ以外で、存在一元論を擁護する近年の文献を探すのは難しいが、散発的に、Rea (2001); Cornell (2013), (2016) を見つけることができる。McDaniel (2009) には、存在一元論の部分的な擁護が含まれる。またセオドア・サイダーは、存在一元論を批判的に検討した論文をいくつか書いている (Sider (2007), (2008))。
- 存在一元論の解説を含む日本語文献としては、小山 (2009), 柏端 (2012) がある (後者では、存在一元論とも優先性一元論とも異なった一元論的見解である、Kriegel (2012) も紹介されている)。数年前の関西哲学会で一元論ワークショップ (小山他 (2017)) が開かれた際には、主な興味は優先性一元論および歴史解釈だったと思われるものの、存在一元論への言及もあった。厳密には日本語文献ではないが、今年の科学基礎論学会欧文誌では同じく小山氏により、(ごく限られた紙幅ではあるが) Monism 特集が組まれた。
- その他、分析形而上学者にしてスピノザ研究者のデラロックが昨年出版した *The Parmenidean Ascent* は、優先性一元論や存在一元論の区分に当てはまるものではないが、ある根本的な意味での一元論的描像を展開したものとして注目である。

参考文献

- [1] Cornell, D. M. (2013), “Monism and Statespace: A Reply to Sider”, *Analysis* 73: 230–6.
- [2] Cornell, D. M. (2016), “Taking Monism Seriously”, *Philosophical Studies* 173: 2397–2415.
- [3] Della Rocca, M. (2020), *The Parmenidean Ascent*. Oxford University Press.
- [4] Goff, P (ed.). (2012), *Spinoza on Monism*. Palgrave Macmillan.
- [5] Hawthorne, J. & Cortens, A. (1995), “Towards Ontological Nihilism”, *Philosophical Studies* 79: 143–65.
- [6] Horgan, T. & Potrč, M. (2000), “Blobjectivism and Indirect Correspondence”, *Facta Philosophica* 2: 249–70.
- [7] Horgan, T. & Potrč, M. (2002), “Addressing Questions for Blobjectivism”, *Facta Philosophica* 4:

- 311–21.
- [8] Horgan, T. & Potrč, M. (2008), *Austere Realism: Contextual Semantics Meets Minimal Ontology*. MIT Press.
 - [9] Horgan, T. & Potrč, M. (2012), “Existence Monism Trumps Priority Monism”, in Goff (2012), pp. 51–76.
 - [10] 柏端達也. (2012), 「一元論をめぐる現代の議論における若干の「カント的」な観念について」, 『日本カント研究』 13: 37–51.
 - [11] 小山虎. (2009), 「なぜ物質的対象は複数存在すると考えるべきなのか?」, *Nagoya Journal of Philosophy* 8: 1–18.
 - [12] Koyama, T. (ed.) (2020), *Special Section of Monism in Annals of the Japan Association for Philosophy of Science* 29. (pp. 57–105)
 - [13] 小山虎, 雪本泰司, 太田匡洋, 立花達也. (2017), 「一元論の多様な展開——一元論に関する現代の議論を受けて」, 関西哲学会第 70 回大会ワークショップ.
 - [14] Kriegel, U. (2012), “Kantian Monism”, *Philosophical Papers* 41: 23–56.
 - [15] Lowe, E. J. (2012), “Against Monism”, in Goff (2012), pp. 92–112.
 - [16] McDaniel, K. (2009), “Extended Simples and Qualitative Heterogeneity”, *The Philosophical Quarterly* 59: 325–31.
 - [17] Quine, W. V. O. (1960), “Variables Explained Away”, *Proceedings of the American Philosophical Society* 104: 343–47.
 - [18] Rea, M. (2001), “How to Be an Eleatic Monist”, *Philosophical Perspectives* 15: 129–52.
 - [19] Schaffer, J. (2007), “From Nihilism to Monism”, *Australasian Journal of Philosophy* 85: 175–91.
 - [20] Schaffer, J. (2008), “On What Grounds What”, in Chalmers, D., Manley, D. & Wasserman, R. (eds.) (2008), *Metametaphysics*. Oxford University Press, pp. 347–83.
 - [21] Schaffer, J. (2010a), “Monism: The Priority of the Whole”, *Philosophical Review* 119: 31–76. Reprinted in Goff (2012), pp. 9–50.
 - [22] Schaffer, J. (2010b), “The Least Discerning and Most Promiscuous Truthmaker”, *The Philosophical Quarterly* 60: 307–24.
 - [23] Schaffer, J. (2012), “Why the World has Parts: Reply to Horgan & Potrč”, in Goff (2012), pp. 77–91.
 - [24] Schaffer, J. (2018), “Monism”, in Zalta, E. N. (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2018 Edition), URL= <https://plato.stanford.edu/archives/win2018/entries/monism/>
 - [25] Sider, T. (2007), “Against Monism”, *Analysis* 67: 1–7.
 - [26] Sider, T. (2008), “Monism and Statespace Structure”, in Robin Le Poidevin (ed.) (2008), *Being: Developments in Contemporary Metaphysics*. Cambridge University Press, pp. 129–50.
 - [27] Turner, J. (2011), “Ontological Nihilism”, in Benett, K. & Zimmerman, D. (eds.), *Oxford Studies in Metaphysics* vol.6. Oxford University Press, pp. 3–54.